

わかしとおゆと

折口信夫

青空文庫

動詞形容詞一元論のたちばは、おもに、形式のうへにあるのだが、中には、意味のうへにまでも立入つて、其説を主張する人がある。今いはうとするわかしとおゆとの如きは、其屈強な材料なのである。

意味において、形容詞わか・しに対して居るお・ゆが、動詞であるのを見ても、一元なることは考へがたくないといふ。しかし、わかしとおゆとは意味において、しつくり、むかひあうては居らぬ、と、いふと、或はかういふかも知れぬ。それは、形式がちがつて居るからさう感じるので、さまを示すも、わざをあらはすも、もとく、似たりよつたりのもので、形容詞と動詞とにわかれて

居なかつた時代から、ある過程を経た今日のありさまでみれば、なるほど、非常にちがつたものゝ様にも思はれよう。けれど、一元渾沌の時代を推論し得る者には、さのみ、むつかしい問題ではない、といふかも知れぬ。自分は、形容詞動詞一元論を、否定せう、とは思はぬが、慙くとも、わかしとおゆとについては、愚見を陳述する必要を認める。

前に、わか・しとお・ゆとは、しつくりと、むかひあうては居らぬというたが、これはさまとわざとのちがひばかりではない。お・ゆに対しては、わか・ゆといふことばが、古く、見えて居る。わか・しのわか^が、生得の体言であるか、否かは問題であるが、自分は、これはある種類の用言からほかの種類の用言にうつらう

とする際に、一時的に体言となつたものであらうと思ふ。

久活・志久活を通じて、形容詞の語根は、多く、ほかの体言なり、用言なりから転じたものゝ多いことは、事実である。自分の考から見ると、高・深・浅・優・近の様なものも、ある用言からほかの用言に転じる際に出来た、一時的の体言にすぎぬ、といふことになるのではあるけれど、今は、これ等についていふ場合でないから、わかだけに、述べる事にする。

自分は、わかといふ語の源に溯つて、わ・くといふ動詞に想到した。

これまでよんだ、きはめてすこしの本のうちでは、まだわ・くといふ動詞に逢着することが出来なかつた。けれども必ず、あつた

語に相違ないと信じて居る。

わき—いらつこ

わき—いかづち

わく—ご

などの、わき・わくは、どうも、音転ではない様で、おい—びと、といふのと、わき—いらつこ、といふのとは、語氣から見ても、おなじく、連用言のやうだし、わく—ごのわくは、なぐ—矢、い—く—弓矢などの如く、連体法のらしく、思はれる。

更に、推量の歩を進めれば、賀茂の別雷神^{ワケ}のわけには、若といふ意が、含まつて居はすまいか。神名帳に、賀茂別雷神社、亦若雷とあるのは、有力な証拠である。之を別の字義にばかりかゝはつ

て説くのは、どうであらうか。上代の人名などに、生成的のものが多いから、このわけなども、或は、其辺から来たもので、わかとかわきとかわくとかの音転で、わけとなつたのであらう。

わ・くといふ動詞こそ見えざれ、い―わ・くといふ語は、立派に、文献の上に存して居る。

い―わ・くの仮字遣については、いわくか、いはくか定め兼ねて居る様であるが、どうしても、いわくと書くのが、本当だろうと思ふ。

い―わ・くのいは、い―行・く、い―宣・る、い―去・る、い―這・ふなどのいで、接頭語である。

即、い―わ・くといふ塩梅に、出来た語で、立派に、わ・くの

あつたことが、推定せられるではないか。い―わ・くのいわに弱の意があるとするのは、い―わ・くであると説くのに劣る。い―わ・くから、いわけ―な・しが出て居る。な・しが無しでないことは、勿論である。

このわ・くが、形容詞接尾語しをよんで、久活形容詞となる際に、わかといふ体言の形をとつたのである。

わ・くは形容詞にうつたばかりでなく、動詞にも再び転じて居る。

お・すが おそ（くす）・ふ（おすひとふ、名詞がある）
よ・すが よそ（くす）・る

むく・む が うごも (くむ) ト

「・る

「・む

な・ぐ が なご (くぐ) ト

「・る

およ・ぶ、つく が およぼ・す、つく・す

右に示した場合の様なのは、自分は、之を、終止名詞法とよぶ。
終止名詞法があると共に、うかーく、ちらーく、さやーにな
どの如き、あの韻をもつた名詞法がある。

さか・る うか・ぶ さま・す さか・ゆ (ゑみーさ・くな
どのさ・くから)

等も亦、その類であらう。

ともかく、わ・くが動詞接尾語の一つなるゆに接して、わか・ゆとなる。

わか・ゆのわかは、わか・しの語根から出たのではなくて、わ・くとゆとが、直接にひつついたものらしい。

さて、わか・ゆに対して、お・ゆがある如く、わか・しに対しては、何があるかといふと、語は、必しも、対照的に発達するものでないから、わか・しに対して、お・ゆの形容詞がなければならぬ、といふ筈はないが、これも、考へる事は、さのみ、難くはない。即、おほし、おほきしの意のお・しがこれである。

論理的觀念の乏しかつた古人は、すく―な・いと、か、みじ―か・

いとか、わか・いとか、ちひーさ・いとかいふ、すべて、少といふ概念に包括せられる語を、一括して、おほ・しといふ語にむかへて居る。

お・しがを・しにむかへられて居る事は、おとをとで、大小をあらはした例に徴しても、明かである。

同時に、お・しが、わか・しに対するのも、不思議でない。

人は、或は、お・しといふ様な形容詞はない、といふかもしれない。けれども、記紀を見れば、おし—ころ—わけ（忍許呂別）、おし—くま—わう（忍熊王）、おし—は—の—みこ（押齒皇子）など、いふ語が多く見えて居る。

このお・しについて、古事記伝には、大の意に解かれて居る。然

るに、橘曙覧は、これを難じて、「大の意なるをおし、といふことあるまじく、はた、そのころならむには、直に、大の字をかゝるべきなり。おなじ意なる語に、文字を様々に、かへてかゝれざる、古事記の文躰なればなり。」（圀炉裡譚）というて、忍人命、押勝などゝ、押、忍の字があてゝあるから、つまり、たけく、いさましく、威徳の盛なるを表はしたものである、とやうにいうて居るが、これは聊か考へすぎて居りはすまいか。自分は、やはり本居翁の引用せられた、熊野忍隅命を大隅命とし、凡河内が大河内と書いてある例を証拠として、おしと、おほしの近い事を主張する。

景行紀四年の条に、仍喚八坂入媛、為妃、生七男六女。云々。第

三曰忍之別皇子、云々、第五曰大酢別皇子。とあるのに、記の方には、大酢別皇子がのつて居らぬところから、古事記伝には、

「按ふに、此は、忍之別と一ツ王なるが、二柱になれるなり。其は、上に云る如く、忍之別の之ノ字は衍にて忍別なる、其忍は大^{オホシ}の意なれば、淤^{オホシ}富^シ斯と、淤^{オホス}富^ス須と、御名の伝への、聊かの差よりまぎれて、二柱にはなれるものなり。かの億計天皇の御名、大脚^{オホシ}とも、大為^{オホス}ともある例をも思ふべし。されば、（中略）此記に、大酢別の無きも宜なり。」と説明してある。これも、参考すべき事である。

万葉十一に、「山しろの泉の小すげ凡^{オシナミ}浪に妹が心をわがおもはなくに」とある凡の字は、また、おほともよんで居る。「凡有^{オホナラ}

者^バかもかくもせむをかしこみとふりたき袖をしのびたるかも」

など、あるのから見ても、凡河内が大河内となるのが、あたりまへで、お・しと、おほ・しの、近い事がわかるではないか。

さうして、また、単に、おしの語根おばかりを用ゐて居る場合がある。大足彦忍代別^{オシロ}天皇（記に、淤斯呂和氣）、忍坂（於佐箇廼

おほむろやに、神武紀）の如き。此事は、お・しが他の語につゞく時に、しを失うたのである、ともいへるが、景行紀に、押別命を忍之別皇子（通釈には、忍足として、やはり、おしとよませて居る）と書いてあるところから見ると、おといふ、語根そのものに、大の意があることが、書紀の出来た時代には、まだ、わかつて居たものと見える。

忍許呂別、押別命、押勝、忍の海といふ風の語法は、いかし穂、うつし身、めぐし子、こひしの人、などゝ、おなじであるが、此語の活用の鈍い事は、自分とても認めて居るが、さりとして、これを、わか・しと對して居る語でないと、一概に却ける、といふわけにはゆかない。

現に、すこ・し、おほ―き・しの如きも、活用は不完全ではあるけれど、すでに副詞の状態から形容詞の範圍にふみこんで居る。古代の形容詞には、この様な、活用の鈍いものゝ、多かつたことはいふまでもない。

時代が進むにつれて、すこ・しは、くときとにはたらく様になり、おほ・しから転じた、おほき・しは、く、し、けれの三段にはた

らく様になつたが、お・しは、途中で亡びてしまつて副詞の状態から、まだ全く、離れる事が出来なかつたおもかげをのこして居る。

すこ・しの如きは、終止形は完全でないが、類推作用はくときとに、之を、はたらかして居る。すこしく、すこしきをあやまりだ、と、排してしまふのはよくはあるまい。

お・しは、記紀以後には、殆んど、用ゐられて居らぬ。だから、曙覧の様な考も出たのであるが、今一層、研究すれば、おもしろい結果を獲ることゝ信ずる。

お・しと、おほ・しとの關係について、おほ・しは、おしの間に、ほが入りこんだものか、但しは、おほ・しのほがはぶかれて、お

・しとなつたものか、断言しがたい。

のみならず、おほといふことばは、非常に意味が広く、そのまゝ、または濁つておぼ、となつて、色々のことばをつくつて居るあたりから見ると、特別に、発達したものとも思はれるし、お・しのお|について、前にいうたとほり、それ自ら、大の意をもつて居る様であるしするから、いづれをいづれ、とも定められぬ。

以上述べ来たところで、自分は、わか・しとお・ゆとは、決して対へてとくべき性質の語ではないといふことゝ、お|しといふ、副詞の状態を脱せない、わかしに對ふべき古語を推定したつもりである。

その後、伴信友の瀬見小河を見ると、「別は若の義にて、称へたるなり。古事記に、宇遲能和紀郎子とあるを、書紀に菟道稚郎子とあるなど思ひあはすべし。狭衣物語に、篠のわき葉とあるも若葉なり。さて、此神名、世に和計伊加豆知と唱へなれたるにあはせて、かの分穿屋薨而升於天とあるにより、或は、鳴神となりて、雲を別けて、天にのぼりませる由などより、別雷の義なり、といはむは、古意ならず。」とあつた。参考にもとつけそへておく。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集 12」中央公論社

1996（平成8）年3月25日初版発行

初出：「同窓 第九号」

1908（明治41）年6月

※底本の題名の下に書かれている「明治四十一年六月「同窓」第九号」はファイル末の「初出」欄に移しました

※複数行にかかる中括弧には、けい線素片をあてました。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2008年8月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

わかしとおゆと

折口信夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>